報告1

物質文化研究の視点から

後藤 明
（南山大学人文学部・教授／人類学研究所・第二種研究所員）

南山大学の後藤です。私は、2003年から2013年まで10年間関わりました、沖縄の国際海洋博覧会記念公園の中にある海洋文化館という博物館のリニューアルに関連したお話をしたいと思います。このリニューアルは私の南山大学のゼミ生が歴代関わっておりまして、この博物館のリニューアルは南山大学の学生がやったと言っても過言ではありません。ここには美ら海水族館もありますが、皆さん水族館だけ見て帰ってしまうことが多いのですが、ぜひ博物館もご覧ください。

先ほど吉田先生から、博物館やオリンピックなど政治的なものと関連したお話がありましたが、沖縄国際海洋博覧会も1975年、沖縄本土復帰に合わせておこなわれた博覧会という意味では、大きな政治的な動きとも関連していました。

当時つくられました海洋文化館が左の写真です（写真1）。リニューアル前の写真なのですが（写真2）、10年かけて、2013年にリニューアルオープンしました。その後、私は自分のゼミ生と毎年必ずここに研修旅行に行っています。右側の写真が、新しくなった博物館の入り口です。「Oceanic Culture Museum」として再生しました。

写真１

写真２

オセアニア、南太平洋の人びとは、小さな島に移住した人びとで、海や、それを成し遂げた船、カヌーを一番の文化的な特徴というか誇りとしており、海洋文化館には、現地から収集された10数隻の船、カヌーが展示されています。

左のような大きな、エントランスに置かれたタヒチ型のダブルカヌー、右側にも大きなカヌーがあります（写真3,4）。体育館のような建物なので、こういうものを展示できるような大きな空間があります。船のような大型民具の展示は、民博でもすごく苦労されていますが、ここは体育館のような本当に大きな建物なので大型カヌーも数隻展示されています。

この中で特筆すべきものが、1つ目は、トロブリアンド諸島のクラカヌーです。文化人類学をやった人なら聞いたことがあると思いますが、マリノフスキーという方が研究した「クラ」という

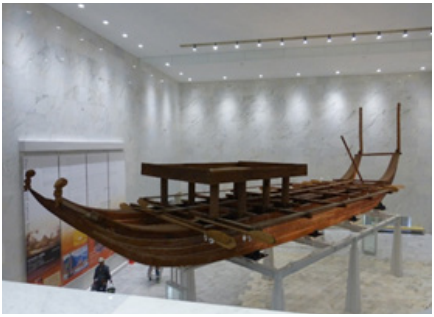

写真３

写真４

交易に使ったカヌーです。詳しくは後でお見せします。2つ目は、ニューギニア本島のモツ族が用いていた巨大な「ラカトイ」というカヌーです。これも現地から来たものです。3つ目は、タヒチ型のダブルカヌーです。船体を双胴にして甲板をつくったりするので「ダブルカヌー」といいますが、こういうものがあります。

ちょっとおさらいしますと、トロブリアンド諸島は、ニューギニアの東方海上です。ラカトイというのは、ニューギニアの首都ポートモレスビーの辺り、それからタヒチ、この辺りのカヌーが3つあるということです。

ところが、この3つのカヌーだけに限ってお話ししますが、それぞれライフヒストリーが全く違います。

クラカヌーは、クラの交易に実際に使われたものです。1970年代に「すばらしい世界旅行」という伝説的な番組の取材でも使われた、実際にクラ交易に使われたカヌーです。

ラカトイというのは、100年近く前に終わった、土器とサゴヤシを交換するヒリという交易に使われていたのですが、数十年使われなくなっていました。ところが、1975年のパプアニューギニア国の独立記念に合わせて、何十年ぶりかにつくられたものです。このときは、エリザベス女王なども来られて、この船かどうかは分かりませんが、乗ったと聞いています。

タヒチ型のダブルカヌーは、もう既に150年か200年ぐらい前につくる伝統は絶えてしまいました。この舟は後でお話ししますが、映画のために、民族学や公開記録から復元されてつくられたものです。住民は今でも、板はぎの小型のカヌーをつくる技術はもっていますが、その技術を応用して、かつて自分たちの何世代前かの祖先がつくっていた大型カヌーを映画のためにつくりました。

つまりこれはそれぞれ来歴、コンテクストが全然違う3つのカヌーが展示されているということです。

まずクラカヌーですが、民博で10年ぐらい前に講演会がおこなわれまして、「すばらしい世界旅行」の映像を作った市岡康子さんが講演されたのをお聞きしました。その後、市岡さんにもお話を聞いています。

私は、リニューアルの過程で、それぞれのカヌーの来歴の調査を現地でおこなってまいりました。その一環でマリノフスキーが滞在した村として有名なシナケタ村に行ってみると、このカヌーに実際に乗ったという古老が2名ほど存命でした。その人たちと記念写真を撮りました。この人たちは当時、もちろん少年でした。彼らは何をやったかというと、あかかきです。水をくむのは大体子ども、つまり彼らは一番年下の少年としてこの船に乗っていました。

2人は写真を見てとてもびっくりしていました。熱帯雨林の気候で、カヌーのような木でつくったモノが40年も原形を保っているということはありえないです。ですから、死んだと思っていた子どもに会ったという感じで、体が震えてきて、涙さえ流します。本当に「えっ、本当？」という感じで驚かれていました。

この赤いシャツを来た古老も、別のときに、この沖縄のカヌーに乗った方です（写真5）。沖縄のカヌーは、「トイラムラ・グーヤウ」という固有名詞が付いています。訳すと「首長の死を悼む」という意味です。クラ交易というのは、大体首長の死を悼むための追悼の儀式になります。それで、そういう名前が付いています。このカヌーで行くと交易が大変うまくいったということです。クラ交易は大体、5～6隻で船団を組んでいきますが、海洋文化館のカヌーは、当時の首長が乗った旗艦のような船で、記憶に残っている船のようです。

「トイラムラ・グーヤウ」というのは伝説的なカヌーなので、その後1980年代に2世号というか、もう一隻つくったそうです。それで、ニュージーランド人が映像を作るときにそれを浮かべたそうです。しかし、その後、そのカヌーは普通に野外に置かれていたので、もう朽ち果てて、なくなっています。つまり、1世号のほうが残っていて、2世号はなくなってしまったということです。ですから、現地の人はとてもびっくりします。死んだ親か子どもに出会ったというように。

写真 5

この写真の方は、当時の首長の甥です（写真6）。ご存じの方もいると思いますが、トロブリアンドは母系制なので、首長権というのは

大体、息子ではなく甥が継いでいきます。彼が今、この村の、いわゆるリーダーです。彼も、クラカヌーをつくりたいと。しかし、つくる技術がありません。例えば、現地ではこういう模型をつくっているのですが、はっきり言って、ものすごく下手です。それで、海洋文化館のカヌーを見て、「ああ、これが本当のカヌーだ」ということになりました。実は、これらの大型カヌーは全部レーザー測量をして正確な図面を作っているのですが、今後はそのようなデータは現地で活かされる可能性もあるでしょう。

写真６

次は、モツ族のラカトイです。「ラカ」というのは「カヌー」、「トイ」は「3つ」という意味です。実際、これはよく見ると、3隻カヌーがあるのがお分かりでしょうか（写真7）。この大型の丸木船は、普段は普通に、一本一本、別々に使われています。魚を取ったりするためにです。かつて年に一回のヒリという交易のために、このカヌーを3本から、多いときは10本ぐらい束ねて、筏みたいなものをつくっていました。そのカヌーを使用し、彼らは大型の交易をしていました。しかし、これも100年ぐらい前にもう終わってしまいました。

写真７

1975年の独立記念日のときにもう1回つくろうということになったのです。それ以来、毎年9月のパプアニューギニア国の独立記念日のときにまたつくられるようになりました。モツ族というのは、首都のポー

トモレスビー周辺にいるオーストロネシア系の人たちなのですが、いろいろな村があります。毎年その中の2つの村が担当して、儀式的に独立記念日に走らせるということになっています。

3番目のタヒチ型のダブルカヌーは、完全に一度消えてしまったものの復元形です。これはイギリスのキャプテン・クックが残した絵画ないし図面なのですが（写真8）、こういうものをベースにつくったものです。

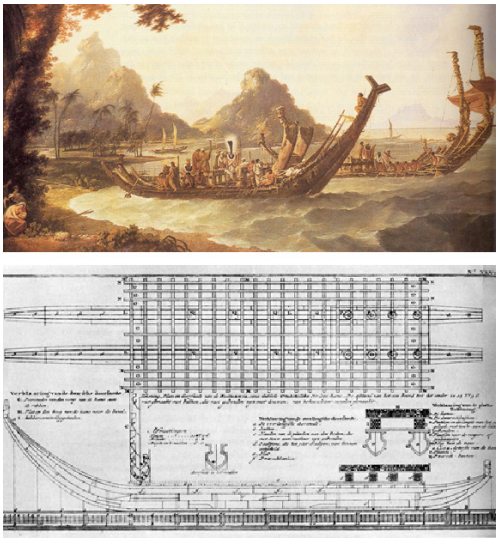

写真８

そのきっかけが、実はハリウッド映画でした。「バウンティ号の叛乱」という有名な話があります。興味があれば、「バウンティ号」とグーグルで引いてみてください。これはもう何度もリメイクされているのですが、1962年のリメイク作品が出色です。実際にタヒチでロケをし、タヒチの人をたくさんエキストラに使い、そして、タヒチ型のカヌーも復元してロケに使っています。1950年代と80年代につくられたバウンティ号の映画は、使われたカヌーを見る限り、かなりいいかげんです。ロケも、バミューダかどこかで撮ったものですね。2番目つまり1962年のマーロン・ブランド主演のものが出色です。

そのときに、実際に伝統カヌーやダブルカヌー船団をつくったそうです。映画に出演したタヒチの方が存命でそのようにお聞きしています。とくに右側のダブルカヌーは、百数十年も前に伝統が絶えて、記憶している人が全くいない状態だったのですが、これをロケのために再現して使ったのです。それで、タヒチのカヌービルダーの村の人たちが、「またこんなものをつくろう」みたいに盛り上がったわけです。

今日はゆっくりお話しできませんが、1970年代ぐらいから、太平洋ではカヌー・ルネッサンスというのが起こってきます。昔のカヌーを復元して、自然を読む力を再生するという動きが始まっていったときと、ちょうどタイミング的に合致したわけです。沖縄国際海洋博覧会も、ちょうどそのときに合ったわけです。それで、カヌーをつくり、日本に送ったということです。そのときに、タウティラ村という、カヌービルダー、船大工の村の村長が日本に寄せたタヒチ語の手紙が今でも沖縄美ら島財団に残っています。沖縄美ら島財団というのは海洋博公園を管理する財団

です。

実際にカヌーをデザインしたのが、ハーブ・カネさんという方です。この方は、ハワイのカヌー研究家でアーティストの方です。このような絵を描いて（写真9の上の写真）、これをモデルにして、実際に海洋文化館のカヌーをデザインしました（写真9の下の写真）。実際に私はインタビューしているのですが、これはタヒチのパペーテ港で試走、初公開をしているダブルカヌーと、沖縄に積み込まれるときの写真です（写真10,11）。

写真９

やはりここでも現地の方を探していったところ、カヌー棟梁の未亡人、奥さまが存命でした。この写真を見せたら、やはり驚いて、体が震えてきて。亡くなった旦那さんの霊がその辺に戻ってきて、嬉しそうに見ているのが分かると言うんです。そのような感動、とにかく、この船が残っていること自体が奇跡だということになって、いかに現地の方々にカヌーは大きな存在なのか実感する体験がありました。タヒチでも、やはり古代のカヌーをつくって実験航海をやった方がいます。左側の写真です（写真12）。これも、ニュージーランドまで実験航海をして、帰ってきてから

写真１０

写真１１

タヒチ博物館の野外に置かれていましたが、これも朽ち果てて、なくなりました。つまり、カヌーというのは大きいので、倉庫のような保存する場所がないと大変です。しかも、外に置いておくと、クラカヌーもそうですし、タヒチのカヌーも、もう朽ち果てて存在することができません。ですから、沖縄の、たまたま屋内に置かれてきたカヌーがほとんど原形を保っていることはとても幸運なことなのです。

写真１２

これは現地の人にとっては奇跡なのです。これは私自身予想していなかった。みんな感動して、「ありがとう」と言われます。別に私が取っていたわけでも何でもないのですが、とても感謝されました。

最後に、海洋文化館は太平洋の人たちの海の文化、例えば、航海術を展示することが一つの大きな目玉なのですが、航海術を今日まで保っているのは、ミクロネシアのカロリン諸島が、ほぼ唯一です。海洋博が開催された当時、実はそこから「チェチェメニ号」というカヌーが日本まで航海してきたことがありました。それは今、大阪の国立民族学博物館で展示されています。

海洋文化館的な立場から言うと、これは「画竜点睛を欠く」ということです。つまり、航海術というのは、博物館の主要なテーマにもかかわらず、航海カヌーがないということは、まさに「画竜点睛を欠く」ということで、4隻目のカヌーとして、実際にカロリン諸島で新しいカヌーを新造してもらいました。

写真１３

カロリン諸島には「航海士」という称号があります。それを持った方でないとカヌーを操れないのですが、グアムのNPO法人で航海術の先生をやっていたマニー・シカウさんです。残念ながらマニーさんは海

洋文化館の完成直前に亡くなってしまったのですが、彼の村でつくってもらうことになりました。実際に彼の故郷のポロワット島というところでつくりました。最初はカヌーにするパンの木を切る前に、霊に立ち退いてもらわないと木を切れないため、きちんと儀礼をおこない、その後村の人たちで半年ぐらいかけてつくり、グアムまで800キロぐらい航海をしました。この写真は、グアムに着いたときのものです（写真13）。

写真１４

ここで、本当は沖縄まで航海してもらいたかったのですが、諸般の事情で結局、沖縄まで航海することはできませんでした。それで、グアムでばらして運んで、もう一回、沖縄で組み立てました。これが、そのときの航海カヌーです（写真14）。

そのときに、星を使った航海術をおこなったのですが、それを再現したドラマを子どもの冒険物語にして、私と天文学者の2人で監修して、今、海洋文化館のプラネタリウムで見ることができます。実際にポロワット島からグアムまで、星を使った航海の物語、子どもの物語にしました。

さて、結論に入ります。他にもカヌーはたくさん、10数隻あるのですが、海洋文化館にあるカヌーを組成（アッセンブリッジ）として捉える必要があるということです。これは考古学の概念です。考古学的組成とは、特定の文化層や遺構、例えば、竪穴住居から一括して発見された遺物群です。短期間の間に同時に製作、使用、あるいは廃棄されたと思われる人工物の一つのグループです。

竪穴住居から土器や石器が一緒に出てきます。それはどのように解釈されるでしょうか？普通は、その当時、一緒に使われていたツールキットの一部だと考えますよね。例えば、弓と矢、または大工さんののこぎりと金槌みたいに。

実際、そうだとは思うのですが、しかし、皆さん、考えてほしいのですが、自分の家の中にあるモノって、同時に使っているでしょうか。例えば、親から受け継いで、もう何十年も使っていないモノ、あるいは、来歴が分からないモノ、そういうモノも1個や2個、ありますよね。

さらに、遺跡の場合は、時代の違うモノが混入するということがよくあります。例えば、縄文時

代の遺跡の中に弥生時代の土器片が混入するようなことです。そういうモノは、縄文時代の研究の立場からはノイズとして取り去って、縄文時代なら縄文時代の生活を考えます。確かに、それは一つの考え方です。もう一つの考え方は、実際に組成には、異なったコンテクスト、また異なった理由で残されたモノが共存しているということです。

今は、例えば、関係ないモノが混入するということは、その遺跡で何が起こったかのヒントになるだろうと。例えば、洪水が起こって、混入するようなことですね。組成の中に、異なるコンテクストをもつさまざまなモノが共存しているということ自体も、一つの問題になるだろうということです。実際の組成には異なったコンテクストで、また異なった理由で残されたモノが共存しています。そのような資料は、博物館の展示物組成を成り立たせた種々の要因の問題提起として生かすべきではないかということです。

先ほど言いました、同時に展示されている大型カヌー4隻を取っても、全然コンテクストが違うモノが共存しているわけです。一般の人は、説明しないと「今でも南太平洋の人はみんな、こういうカヌーを使っているのだな」と思いますよね。そうでなくても、いわゆる大航海時代の段階で、あるいは、マリノフスキーが民族学的記述を始めた20世紀初頭の段階で、それぞれの島で異なったカヌーが使われていたという知識として使います。それはそれで、意義はあるし、博物館資料としてはそのように使うのは一方法だと思います。

しかし、それとは別の切り口で、カヌーたちが40年間に現地で変容しながらももち続けた意味を問う必要があるでしょう。そして、40年の時を越えて、日本と現地の社会との関係再構築のため、カヌーのもつ現代的な意味をリアルタイムで示すツールとして活用すべきであるというのが、私が海洋文化館のリニューアルに10年関わった結果の結論です。

一つ一つのカヌーには来歴があります。ライフヒストリーがあります。一つ一つの背景に物語があります。それも博物館展示の一つの有益な情報、あるいは価値として展示に生かしていく。全くコンテクストの違ったモノが共存しているということ自体も、博物館の展示の価値の一つとして生かしていくことができるだろうと考えています。

この展示をつくるときに監修に関わった研究者は10人ほどいるのですが、とても多くの議論をしました。大きな概論は展示をいつの時代をターゲットにするかということでした。「民族誌的現在」という言い方があるのですが、19世紀、20世紀ぐらいを展示にするか、それとも、今をするかという議論です。結論としては、「今」を強調しようということにしました。

例えば、バヌアツというところのキッチン、台所の復元をしているのですが、その中にはタロイモやヤムイモなどの伝統的な食材も展示していますが、それ以外にも缶詰や即席ラーメンのビニールの包み紙なども、わざわざ置いています。今、こうやって彼らは生活しているのです

よということを紹介するために置いています。

従ってカヌーも、今、カヌー・ルネッサンスという動きが太平洋中で起こっていて、そのようなコンテクストの中でそれぞれのカヌーを展示する必要があると私は考えています。3Dのレーザー測量の図面も今後、現地に還元していくことも必要でしょう。そのようにカヌー資料は「古き良き時代」の資料として愛でるのではなく、さまざまな矛盾や困難を抱える現地社会の現代と関わる、あるいはそれと連動するためにこそ展示するべきでしょう。2016年にグアムでおこなわれた太平洋芸術祭のときに、私どもが呼びかけカヌーサミットを開催しました。このときは沖縄美ら島財団からも参加していただき、海洋文化館関係の映像などを披露しました。

また私自身も海洋文化館のリニューアルをきっかけに、日本で日本航海協会という、太平洋の人たちと連動するためのNPO法人をつくり、活動しています。そういうダイナミックな双方向の関係構築のために、博物館の展示というのは使っていくべきだろうと感じております。

以上、博物館のカヌーの展示を中心に、組成としての博物館展示ということでお話しさせていただきました。どうもありがとうございました。